

神社を地域防災の拠点として活用する

高田知紀（兵庫県立大学 自然・環境科学研究所 准教授）

はじめに（神社と防災の関係）

日本各地に鎮座する神社は、数百年から数千年の時間単位で国土のなかに存在しています。その間、人間社会は人為的・自然的を問わず様々なリスクにさらされてきました。すなわち、長く日本の国土に鎮座している神社は、その間に発生したリスクを何らかの形で乗り越えながら現在にその姿をとどめているのです。

2011 年の東日本大震災の後には、多くの人びとが神社と自然災害リスクとの関係に注目することとなりました。メディアによる報道やいくつかの研究論文によって、東北被災地の沿岸部で津波の浸水域を避けるように神社が立地していることが報告されたからです。

一方で現代社会においては、地域での氏子制度の崩壊、神職の高齢化など様々な問題から、神社そのものを適切に維持管理し、後世に持続可能な形で残していくことが困難になりつつあります。今、わたしたちは「防災」という共通の課題のなかで、神社のもつ多様な価値をどのように捉えることができるのでしょうか。

神社空間の災害リスクポテンシャル

南海トラフ巨大地震が発生した場合に大きな被害が出ると想定されている和歌山県の神社についてシミュレーションしたところ、津波については県内の神社の約 9 割（調査対象の神社 412 社のうち 374 社）が被害を免れうる立地であることがわかりました。他にも、河川氾濫に対しても約 9 割（調査対象の神社 412 社のうち 375 社）の神社が安全性を担保しうる立地という結果になりました。和歌山県の神社は、コンビニエンスストアや公民館、小学校よりも数が多いことから、地域防災の取り組みのなかで活用できる大きな可能性を秘めていると言えます。

式内社・伊達神社のコミュニティへの思い

和歌山県の神社は水害に対して比較的安全な立地にある一方で、残念ながら地域の神社は住民にとって、いざというときに避難できるような身近な存在ではありません。かつてはコミュニティの大切な活動の場として多様な価値を有していた神社空間は、現代においてその多くが地域社会との関係を徐々に失いつつあります。

和歌山市・有功（いさお）地区に鎮座する伊達（いたて）神社では、人びとが日常的に神社に訪れるきっかけをつくるとともに、地域防災コミュニティのひとつの拠点として神社空間を活用するための様々な取り組みを進めています（図 1）。伊達神社の宮司・藪内佳順さんは、奉職する伊達神社が、南海トラフ巨大地震や紀ノ川の洪水などの災害リスクに対して安全な立地であることを知り、いざというときに地域住民の緊急の避難場所になるように、社務所に水や非常食などを備蓄しました。地域防災という課題に対してアプローチすることが、神社と地域社会との関係を再構築するための大



図 1 和歌山市・有功地区に鎮座する式内社・伊達神社の境内

記紀のなかで、スサノオノミコトともに木の種を国土に播いたイタケルノミコトを主祭神としている。

切なききっかけとなると考えたのです。

地域を歩いて体感する「有功地区ふるさと探検ツアー」

2018年5月よりトヨタ財団の研究助成を受け、災害時の自主避難所としての整備を進めていた伊達神社を拠点に、新たな防災コミュニティ形成の社会実験を実施することになりました。そのためにまず実施したのが、「有功地区ふるさと探検ツアー」です（図2）。このツアーには、氏子総代やその他の近隣住民にも呼びかけ、まちづくり、交通、地質学、考古学などの専門家も参加しました。そうすることで、「防災」というテーマに限定するのではなく、地域の歴史や史跡名所、地理地形の読み解き方、教育や福祉の問題、地域づくり方策など多様で包括的な視点をもちながら、フィールドワークと対話を展開することを目指したのです。

ふるさと探検ツアーの重要なポイントは、見慣れた風景に対して意識的に「？」をつけることです。特に微妙な高低差に着目すると、日常の風景から色々な情報を得ることができます。たとえば有功地区の真ん中には、東西に直線的な数メートルの高低差があります。これは、根来断層という断層の活動によってできたものです。

また過去の航空写真をみると、ため池の下流側には田んぼだけが広がっていました。しかし現在は、家や保育所などができています。豪雨や地震などでため池が崩壊すると地域に大きな被害をもたらします。大切なのは、ハザードマップに掲載されていないような局所的なハザード情報を地域の人びとが知ることです。

ふるさと探検ツアーは、地域の貴重な資源についても人びとが認識する機会となりました。伊達神社以外にも、有功地区には多くの寺院やお堂、祠、井戸などの史跡があり、それぞれに謂れや伝承があります。また山側を歩けば、紀ノ川に向かって広がる素晴らしい景色に出会うことができます。

これらの地域の詳細なハザード情報、あるいは身近な史跡や素晴らしい景観といった地域資源を、人びとは普段ほとんど気にせずに生活していました。ふるさと探検ツアーをとおして参加者が共有したのは、大切な資源を活かしながら、防災をはじめ地域の抱える課題を解決するための実践活動の必要性でした。

「無病息災マップ」製作プロジェクト

ふるさと探検ツアーの成果をふまえて、伊達神社周辺の史跡名所やハザード情報などを掲載したマップづくりのプロジェクトを進めることになりました。プロジェクトには伊達神社宮司、氏子総代、さらに神社に隣接する有功小学校「育友会」のOBが参加しました。

マップづくりのミーティングと現地確認を何度も繰り返すなかで、「多様な人びとが多様な用途で活用できる地図」をコンセプトとして、絵地図による表現で有功地区の個性を強調したデザインとすることを決めました。災害情報だけでなく、地域の魅力や価値など多様な情報を組み込んだ地図とすることで、楽しみながらハザード情報を認識できるようなしかけを目指したのです（図3）。

一方で、多様な情報を組み込めばマップとして見づらいものとなってしまいます。そこでマップの表現方法としては、地域の地形と建物などの最低限の要素をベースマップで表現し、その他の情報についてはマップの使用者が個々にカスタマイズできる形にしていく



図2 有功地区ふるさと探検ツアーのようす
ハザードマップに載らない局所的な災害リスクを確認しながら地域をくまなく歩いた。



図3 絵地図作家・植野めぐみ氏によるデザイン

人びとが思わず手に取りたくなるデザインをコンセプトに、プロジェクトメンバーが議論を重ねた。

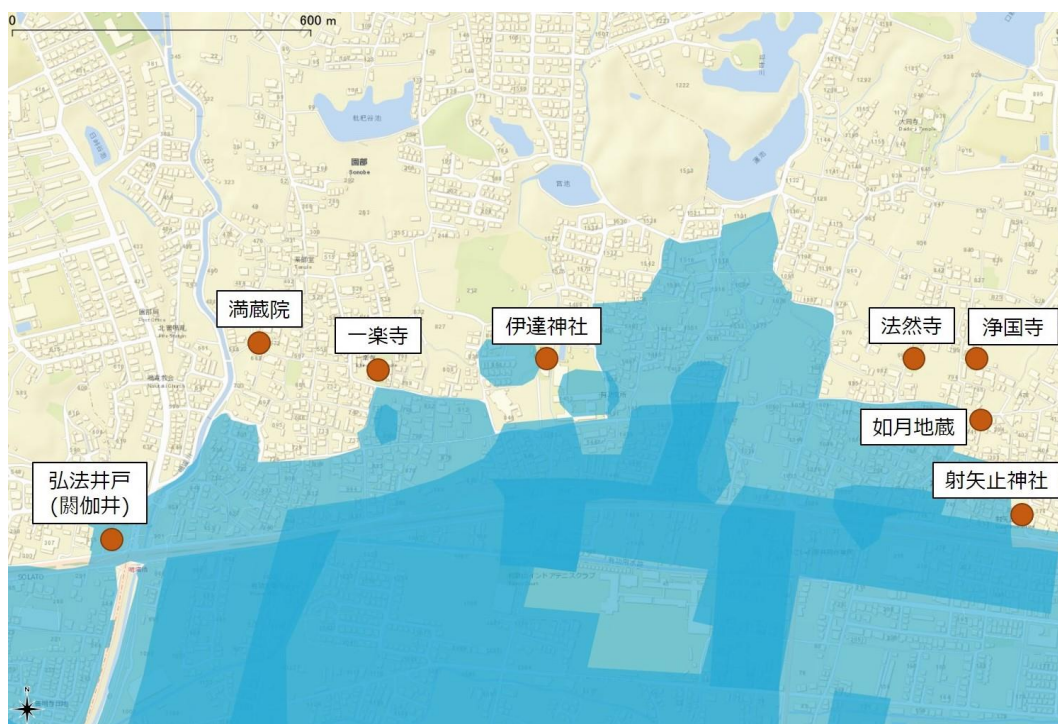


図4 伊達神社周辺の史跡と河川氾濫浸水想定域との位置関係

ちょうど浸水想定域の境界部に史跡が位置していることがわかる。

こととしました。具体的には、ベースマップの上に、その他の情報が書き込まれた透明のフィルムを重ねていくことで、それぞれが関心のある情報が地図にプロットされていくような方法です。またベースマップはクリアファイルになっており、地図以外の用途として

利用できるだけでなく、水でにじむ心配がないことから、雨のなかの避難時にも有効に活用することができます。

マップづくりプロジェクトで大切にしたことは「地域の人びとが地域内を歩く契機を創出する」ということでした。有功地区は、住民の移動手段は多くが車やバイクです。そのため、日常的に通る道は限定され、さらに地域の微細な地理の変化を実感することがほとんどありません。つまり紀ノ川の氾濫や山側で土砂災害が発生した際に、水や土石流がどのような範囲で被害を及ぼすのかということについてイメージしにくいのです。

マップづくりのミーティングを重ねるなかで、有功地区の神社・寺院やお堂などの配置がちょうど河川氾濫時の浸水想定区域の境界上に位置することがわかりました（図4）。また、土石流や斜面崩壊のリスクが高いスポットは、紀ノ川への眺望が開けている場所です。そこで、史跡・名所や眺望点を結ぶウォーキングコースを設定し、そこを歩くことが自動的に地域のリスクの高いエリアを認識する契機となるようにしました。地域の歴史的文化的背景を知るとともに、地形を体感しながら歩くことで健康を増進しながらも、災害リスクの高いエリアを同時に把握するという複合的な価値を組み込んだマップにしたのです。

災害情報と避難経路、住民の健康増進と交流、さらに地域の歴史的文化的背景を統合的に捉えたマップは、人びとが自身の暮らす地域の特性を理解し、健康に暮らしながら、災害時に適切に行動するためのコミュニティの下地を形成することに貢献します。そこで伊達神社を核としたこのマップを「無病息災マップ」と名付けました（図5）。

「わざわい」を避けて「さいわい」を得る

神社において実施する夏越の大祓などの祭事はまさに、無病息災を祈願するものであり、健康で安全に暮らすことそのものが一つの幸福の形であるという考えにもとづいています。無病息災マップは、そのような伝統的な日本の幸福概念を防災コミュニティの形成という現代的課題にもとづいて具体化したツールであるといえます。

伊達神社で実現したのは、地域防災に貢献しうるツールを作成するプロセスを通じて、神社を拠点とした新たな地域主体を形成することです。さらにプロジェクトにかかわった人びとは、地域空間の構造と履歴に対する多様なまなざしを共有していきました。

古くから日本人は自身の身に降りかかる「わざわい」を回避するために祈り続けてきました。「わざわい」という日本語の語源は「わざ」が「這う」です。「わざ」とは、「人知を超越した何者かの力」という意味の言葉です。すなわち「わざわい」はそもそも人びとがコントロールできるものではなかったということがこの言葉の語源から理解できます。わざわいを回避するための祈りの空間として神社は長く地域社会のなかで重要な役割を果たしてきました。

本稿で示した知見は、「防災拠点としての神社」という視点でみると今日的ではありますが、「わざわいを回避するための祈りと実践の場」という点では、神社空間がもつ普遍的な価値を体現していると言えます。先人のわざわいへのインタレストに着目し、様々なスケールでの「時間性」のなかで防災減災のあり方を考えていくことが、わたしたちの安全安心な暮らしを実現することにつながります。



図5 作成した「無病息災マップ」
伊達神社の社務所で配布されている。